

論文の内容の要旨

論文題目 隋唐洛陽城水利研究

氏名 宇都宮美生

中国のほぼ中央に位置する洛陽盆地には前後して五か所に都城が置かれた(図1)。このうち隋唐洛陽城は、隋煬帝が自然河川を取り入れた形で盆地の西端の狭小の地に置いた都城であった。本論はこの隋唐洛陽城の立地と構造について水利という視点から検証し、洛陽城の有する歴史的意義の一面を見出すことに主眼を置くものである。

序章「隋唐洛陽城の都城史研究の動向と諸問題」では、隋唐洛陽城の立地選定にかかわる問題点を提起して、中国都城研究における都市水利史研究の動向を整理した。はじめに都城研究を行う意義を確認し、次いで歴代王朝の洛陽奠都の意図を概観することにより、洛陽は東方に近く、水の存在が洛陽城の設置と運営に大きくかかわっていることが想定された。ここに、洛陽城の水環境を考究する方向性を導き出した。都城における水利史研究は多分野で行われ、それぞれ特有の視点から進められているため、専門性が強くなっている。そこで本論では、文献史料の分析のみならず考古学の成果、歴史地理学的な視点、水利工学および土木・建築学の情報を併用した総合的な分析を行うこととした。研究の足掛かりとして水路の復元を試み、そこから隋唐の水利用の実態と水に対する概念を明らかにして、煬帝が目指した都城理念と唐代に継承された都城運営の一面を解明することを目的とした。

第一部「隋唐洛陽城をとりまく水環境」では、隋唐洛陽城の水系の考察として自然河川の洛水と穀水および人工水路の運河をとりあげ、これらの特徴と関係を明確にした。

第一章「隋唐洛陽城における河川、運河と水環境―問題の所在―」では、洛陽城と水利との関係を考究する前提として、城内外の水路と施設について初歩的な考察を行った。ここでは、史料の記載を主に活用し、考古学的成果と筆者の現地踏査を補充して簡単な復元を試み、水利方面から各水利施設の所在・機能・役割について整理した。これにより、隋唐洛陽城水系の全体像が浮かび上がり、洛陽の存在条件として穀水・洛水・運河・皇室庭園・穀倉にかかわる研究が不可欠であるとの認識に至った。

第二章「隋唐洛陽城「洛水貫都」考」では、城内の中央を東西に流れる洛水（図2）について考察し、天文思想・防衛面・防災面・経済面・都市水利における利便性が洛陽城の都城運営を多方面から支えていたことを明らかにした。特に、この「洛水貫都」構造には、穀水・瀍水を合わせて引水・合流・分流を組み合わせた総合的な水系管理体制を人工的に創出することで、洛陽全体の水系を統制し城内への多量の水の供給を可能にするとともに、災害を最小限にとどめるねらいがあったことが理解された。そして、煬帝が洛水上流の地域を選定したことによって、これらの利便性につながったことを導き出した。日本や宋の都城に河川や運河を内包する都城が出現したことに対して、洛陽城の存在が少なからず影響している可能性も見出された。

第三章「隋唐洛陽城の穀水」では、隋唐以前と隋唐期の穀水河道についてそれぞれ復元を試み、その変遷過程と利用状況から隋唐洛陽城の立地選定理由について考察した（図1）。ここでは、穀水が洛水の北岸に位置した都城の運営には不可欠であり、洛陽で最大の河川である洛水よりも重要な水源であったことが確認されるとともに、宮殿区における防衛・供水・景観だけでなく、城内に設置された運河に流れ込んで排水と運搬の便に供されたことが理解された。さらに、洛水上流だけでなく、穀水の上流地域で洛水と瀍水が近接する一帯に都城を置いて都城の水利を調節・管理したことが、洛陽城内に設置された運河の運営にもつながったことを導き出した。

第四章「隋唐洛陽城の運河―通済渠を中心として―」では、洛陽城内を流れる各河川の支流を水源とした運河について流路の復元と構造・機能を明らかにし、洛陽城内に設置された運河（図2）の歴史的意義を考えた。その結果、煬帝は洛陽城建設時に城外に運河を設け、自ら運河を使用し江南各地を見聞した後、洛陽城を城内に延長させたことが判明した。この段階的な運河の開鑿には、北方都城の運河形態を継承し、さらに南方運河の形態

を導入したことが明らかになった。また、洛陽の運河は、後に登場する揚州城や開封城のような運河都市の様相にも大きく影響していることが理解された。

次に、第二部「隋唐洛陽城の施設と水利」では、水にかかわる都城施設として皇室庭園と穀倉をとりあげた。

第一章「隋唐洛陽城の西苑の四至と水系」では洛陽の皇室庭園と都城とのかかわりを考察する前提として、西苑（図2）の構造や水系と離宮の配置について整理した。洛陽城の西側に設置された広大な西苑には、内包する洛水・穀水からの引水により渠・池が造られ、臨水する離宮あるいは山上の離宮が多く建造されたことが明らかになり、さらに隋と唐では規模・範囲・内部構造に大きな違いがみられた。両代における西苑の役割を考えるうえで、苑内の自然環境、特に水とのかかわりを考察する必要性がここに提起された。

この第一章の問題提起を踏まえ、第二章「隋唐洛陽城の西苑の役割と水利」では西苑が宮城の西側に設置された理由および隋唐両代の構造と利用方法の違いを比較した。そして、西苑の特徴を見出し、洛陽城に対する西苑の水利の役割について考察した。その結果、西面における防衛目的に加え、洛水と穀水が形成する西側の地形の利用に主眼を置き、娯楽を兼ねた日常的な水管理によって洛陽城への供水を調節したことが理解された。また、西苑の構造は秦・前漢以来の北方の伝統を継承し、遊牧系の北齊鄴や南朝建康の要素も取り入れていることから、南北両文化を総合した皇室庭園であったことが導き出された。

第三章・第四章では、洛陽地域の隋唐の四大穀倉（図1）を検証した。まず、第三章「隋唐洛陽城の含嘉倉一設置と役割に関する一考察」では未解明の部分が多い含嘉倉の機能と役割について考察した。それにより、含嘉倉は隋の倉ではなく唐初の洛陽への東巡と執政により、徐々に窖が増設されていったことが明らかになった。また、長安の出費を補填するための経済的関与から、長安での執政を維持するための副都運営という政治的関与への変化を見出し、東巡の実施過程で官倉から転般倉へと転じる同倉の役割を導き出した。さらに転般倉としての役割を他倉と比較し、首都機能を持つ洛陽に置かれて後方に陸路を有したことが、内陸にありながら同倉が発展する条件であったことが理解された。そこには両都経営に関わる為政者の政治的な思惑が大きく影響し、政治的関与をする含嘉倉の役割が重要であったことが明らかになった。

この第三章の考察を踏まえ、第四章「隋唐洛陽城の穀倉一子羅倉、洛口倉、回洛倉および含嘉倉をめぐる一」では、隋三倉を併せてそれぞれの位置・構造・役割について明らかにし、四倉の相互関係と隋から唐への穀倉の変遷過程について考察した。その結果、子

羅倉は宮廷内飲食用の穀物倉、洛口倉は洛陽・長安への転般倉および北方への軍倉、回洛倉は洛陽城の太倉として、各倉が役割を分担し隋後半の洛陽城を支えたことが理解された。唐高宗期からは城内に含嘉倉が設置され、倉庫令の規定を踏まえた業務の改善により含嘉倉一倉がこの三倉の役割を集中したことも明確になった。ここに、隋三倉から含嘉倉一倉への移行は単なる構造や設置場所の変化だけでなく、隋から唐に至る過程において行政実務の変化もあらわれていることを導き出した。

終章では本論の研究成果を総括した。隋の煬帝が洛陽城を建設した目的の一つは、各地からの距離が等しい洛陽に穀物を集積することであった。そのため煬帝は水利に着目し、洛水・穀水・瀍水の近接する場所に新都を建設して洛水を城内中央に取り込み、城内から運河を開鑿した。洛陽城西側の洛水と穀水の上流に西苑を設置し、苑内の洛陽城に近い場所に建造した離宮や水利施設で日常的に水管理をすることにより、洛陽城への供水を調節した。洛水下流の洛陽城内でも引水・合流・分流を組み合わせる水利システムを構築し、その排水先を城内の運河にすることで、供水・排水・貯水・景観・運搬・防衛といった都市水利の機能を完備した(図2)。このような洛陽城と西苑を併せた総合的な水利システムと管理体制が洛陽城の運営を根底から支えたのであり、それを可能にしたものこそまさに河川近接地での奠都であった。ただし、水利構造が際立っているとはいえ、洛陽城は南朝建康城の完全な再現を目論んだものではなく、北方と南方の都城あるいは景観における特性を融合したものといえる。加えて、同時代の地方都市・運河都市、後代の中国の都城および日本の宮都への時間的・空間的影響も想定される。以上の考察から、洛陽城は北方都城の発展過程における一つの到達点であることはいうまでもなく、南方の特徴も兼ね備えた進化型かつ集大成の都城であり、これ以降の都城形態の出発点でもあるとの結論に至った。

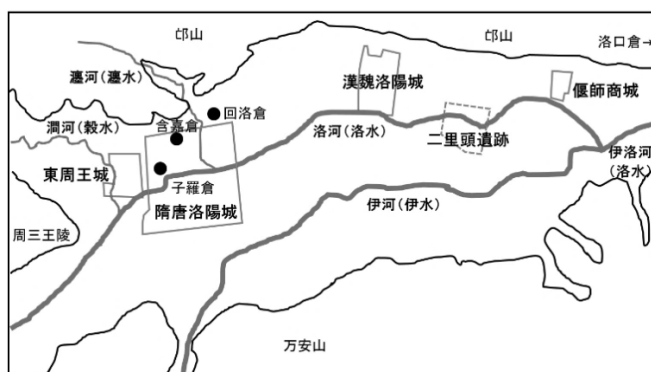


図1 洛陽盆地と都城概念図  
(現在の河道)

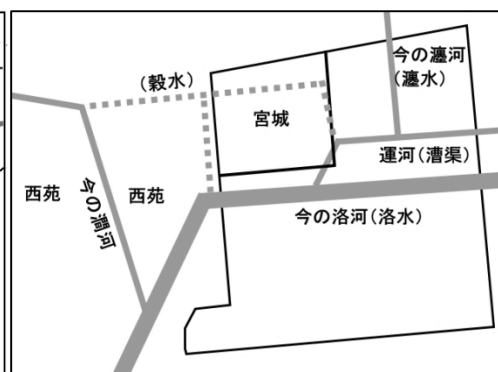


図2 隋唐洛陽城概念図  
(本論の考察に基づく)